おりぬしさん　奮闘する。

荒畑縄笠山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おりぬしさん　奮闘する。

【Ｎコード】
Ｎ９１６０Ｗ

【作者名】
荒畑縄笠山

【あらすじ】
いきなり、ぽつんと一面白の世界に放り出されたら、どうしましょう！？

やって来たのはＣの世界。そこに居た黒い球の無念を晴らすため、コードギアスの世界に降り立った。
原作知識あり。今のところ単語だけ　ｎａｒｕｔｏ　ｈａｒｒｙ　ｐｏｔｔｅｒ　ｈｕｎｔｅｒ　ｈｕｎｔｅｒ　使用。
オリ主　微最強？設定で、生徒会長の双子の姉として、物語を奮闘

します。

おりぬしさん　放り出される。（前書き）

駄文です。計画性無しなので、続くかどうか微妙です。
それでも良いという方のみ、ご覧下さい。

おりぬしさん　放り出される。

いきなり、ぽつんと一面白の世界に放り出されたら、どうしましょう！？
なんでぇーーー、おもいっきし叫んでも反響しないし、と背後で黒いものが蠢いた。

「誰！？」　　てか、何だ？？

振り返り、見たものは黒い球。
白い空間に浮かぶ、球状の中心でぐるぐる渦巻いている物体。
それは、神だと名乗った。　しゃべった！？

かみ、から神に辿り着くまでしばし間があき、さらに暫しの間を要してやっと自身の死に繋がった。
「私は、死んだのか？」
と一応、認めたくないが確認までに問うと。それは「そうだ。」とあっさり応えた。　　んな、あっさり

あっけなかった。と誰に聞かせるでも無く、自身の死を口に出していた。

思えば、トラックがこちらに突っ込んできていた。
即死だったのだろう。
最期に苦しむことは無かったのは救いだ、と思わないとやってられん。

今まで、17年間の生を振り返る。
・・・・思い返すことがあまりに少なく、無性に味気なくて泣けてくる。
無為に過ごしていたあの時を嘆き、こんなにも短いのなら、
もっと生に執着して、生き汚く世界で足掻ければ、この空しさは無かっただろうか？

はっきりいって、後生だが。

そこでふと、疑問が浮かぶ
「此処は死後の世界か？」

私と、神と名乗る黒い球以外何も無い、真っ白な世界。
あえて一言でいうと、何も無い。天地も境も無く真っ白け。
想像していたのとはあまりに違う。
三途の川は？お花畑は？地獄の世界は勘弁してほしいなぁ。

物体は、しばし沈黙し、
「此処は私の外。」
「…よく解らんが、別の説明を求める。」

今更ながら、あまりのことに緊張して固くなっている。普段なら口

調使わない。印象悪いし。

ついでに言えば、この黒丸は神さまらしい。
自称神さまに向って訊く口じゃないなと
「…お願いします。」後付けだが慌てて添える。

唸る様な、低い音を立て、徐に声を発する。
「私はCの世界、集合無意識の集まる所、魂の還る場所、無に還り新しく生へと転ずる所、神と呼ばれる存在。
本来死者は私の中に還るものだが、お前を取り込むことは出来なんだ。」

「つまりは、仏教思想で言う輪廻から外れた。ということですか？」
不安が過る。もし生き返れないというなら、此処でこのまま永い時を過ごさないとならないのだろうか？
しかしそれに否や、と「無理矢理だが、転生は可能」と続き、
思わず安堵のため息が漏れる。

「…　おそらくは、何かしらの要因でこちらに飛ばされたのであろう。私の中に入れないのであれば、魂を浄化すること無く次の生へと転ずるより他無い。」
浄化？　転ずる？
「それは、前世の記憶を持って転生するということですよね？」
「いかにも。」

ならば

「次の生を選べたりとか、出来ませんか？」

「やってやれんことは無いが、対価をもらうぞ。」

お

「具体的に何を払えば宜しいんでしょうか？」

そこでまた低いうなり声が響く。

「…　私の悔いを晴らしてほしい。」

あらら、随分と人臭い。

「へぇ～。神さまも後悔するんですね。でも私、非力ですから叶えられないかもしれませんよ？」

ここぞとばかりに上乗せしちゃいましょう。

「うむ、ただでとは言うまい。私の願いを叶えるために必ず使うというのであれば、出来る限りはしてやろう。」

やった。と内心勝利のポーズ

「解りました。全力を尽くすと約束しましょう。で、悔いとは？」
満面笑みの営業スマイル。作り笑いには些か自身があってよ？

しばし間

「…．ある少年を救ってほしい。」

あや、あんまし反応よくないね。やっぱり本物じゃなきゃ、ダメ？
それはさておき

おやおや、神さまが個人を救いたいだなんて

「どのような方なんでしょう？」

神に愛される少年。いるんだねぇ、そんなの。

神さまは何も無かった空間に鏡の様なものを出現させる。
それに過去を映写し始めた。

少年の一生。
そして、付随する周りの世界を映し出す。

「この者は、私に明日が欲しいと願った。
しかし、その後直ぐにこちらに来てしまった。私はあの者にもっと明日を生きてほしかったのに、死を選んでしもうた。
いや、選ばせてしまったというのが正しいのやも知れん。」

早回し、ダイジェストで送る少年の一生。
見終わってまず綺麗だと、思った。
容姿だけでなく、その生き様も。

そして、周囲の人物に憤慨する。
不幸が不幸を呼ぶ。とは、まさにこの少年に贈られた言葉ではないか。
余りに不憫過ぎる。何だこの周囲の人物は。なぜ、疑問に思わない？　大人子ども関係ない、出来ないと自己完結して結果を待つばかりだ。

手を差し伸べてあげられなかったのか。

大切なら

心が落ち着くのを待つ。冷静になろう。

「・・・では、このルルーシュという少年の身近な人間に生まれ変われば良いのですね？
質問ですが、居なかった人物でも可能ですか？」

それは、なるべく多くの人間を残しておきたかったから。憑依とかしても上手く行かない気がしたから。

それに、可と返ってくる。

「では、このミレイ＝アッシュフォードの双子の姉にして下さい。
それから異能の力を使っていましたが、今から挙げるもので出来る能力を下さい。

一つ目は、野営でも堪えうる体力と、身体能力、特に武術とバランス感覚、感覚神経の能力を上げること。

二つ目は、人との巡り合わせの運を上げること。最低でも二人分は確実にほしいですね。

三つ目は、動物との意思疎通を可能にする能力。協力を得られる能力。

四つ目は、…．出来ればですが、念能力とかチャクラの様な気功術を身につけたいのですが、
できますか？」

「ふぅぅむぅう・・・。一つ目と二つ目は大丈夫じゃ。三つ目は、ギアスとしてで良いならかのうじゃな。四つ目だが、その能力についてピンとこんのだが、それはどのようなものじゃ？」

やっぱり、この世界には無いのか

「ええとですね、ナナリーの足を特殊能力によって自由に動かせるように出来たら、ルルーシュ少年も此処まで頑にならなかったのではと思いまして。代用出来る能力を存じ上げませんか？」

ふむ、それならと

「ナナリー自身の治癒能力を上げておこう。」

ああ、なるほど。この人は神さまだ。私以外でも干渉するのは容易いと。　なんか、神の悪戯って本当にあり得るのかも。

しかし残念。私も使いたかったんだけどな。念とか。

「正し、ナナリーの力は、視力と同様自らの意志でのみその能力を開花させる。」

だよね。ふむ、あの兄妹の根性たたき直しか。骨だな。

「解りました。善処しましょう。ついでといっては何ですが、今此処で修行してから転生したいのですが。」

「それはかまわんが、記憶としてしか転生出来んぞ。」

「感覚と修行方法を養いたいので。出来れば、師となって下さる方を今此処にお願い出来ますか？」

ふむ、と唸り

「よかろう。これから来る者で適した者をこちらに寄越そう。」

「ありがとうございます！！」

これには心から笑みを浮かべることが出来た。

こうして、暫し白い空間で神と二人きり過ごして待っていた。

が、何の因果か

「あら、私は死んだはずでは？」

来たのがサヨコさんだったのは、二つ目の能力故なのか。

訳を話すと喜んでと快諾して下さったのは嬉しいのですが・・・

まじ、厳しいっす。サヨコさん！！！！！！
どっかーーん、と吹っ飛ぶのなんて当たり前。
でも、忍の技とか教えてもらえたりして、役得。
諜報や、所作法、ついでに料理まで教えて頂きました。

１０余年懸けて、なんとか免許皆伝までは行かずとも、及第点は頂けました。
だって生まれ変わる前の能力は精々並。これ以上は期待出来ないということで

集合無意識の中へと還ってゆくサヨコさんを見送りながら
（あーでも彼女とはまた初対面からやり直しなんですよね。）
惜しいなぁ。

今気づきました。

それから、
転生する直前に言われた言葉

「前生での業は消えること無く、次の生へ受け継ぐことになる。業は命運を引き当てる。堪え難くとも逃れられれん。
今回私の中に入れられなかった、ということは、来生にも持ち越されるやも知れん。

くれぐれも魂を穢さぬよう心して生きるように。」

最後の最後で神さまらしき言葉を頂きましたとさ。

おりぬしさん　放り出される。（後書き）

駄文失礼しました。
続くように頑張ります。他にも書きたいのがあるので浮気しつつ頑張ります。

おりぬしさん　転生する。

おぎゃあ　ほぎゃぁ

私こと、クレア＝アッシュフォードとして新しい生が始まった。

とりあえず、行動出来るようになるまで、自我を眠らせておこう。
記憶が風化しないようにと、成長に不具合が生じないように。

次に目覚めるのは3歳くらいで良いかしら。

転生を果たし終えたばかりだが、しばし眠りにつくことにした。

3年後
いよいよという気がしてならない。死後の時間が前世の一生分あったし、その日々は何倍も濃かったから。
これから、私は荒波に出る。でも、そんなに心配してない。
なぜなら、師匠がよかったから。

様々なことを仕込んでもらったし、知識として蓄えられている。
成人した体なら、たとえ、ジャングルだって生き残る自信も出来た。

サヨコさん、わたし頑張りますね。

「待ってー。クレアーー。」
ぱたぱたと、まだ少しおぼつかない足取りで突進して来たのは、双子の妹、ミレイ。
後に、アッシュフォード学園生徒会長となる破天荒な少女だ。
今はまだその破天荒ぶりは現れていないのか。
少々元気のよい、普通のお嬢様をしている。
まあ、比較対象のお子様が先日会った、ルルーシュだから余計かもしれないが。
この世界でも、アッシュフォードはヴィ家の後見人だ。
そして、年も近い私たちはより深い繋がりをつくるため挨拶に窺った。

「おはつにおめもじつかまつります。ルルーシュでんか。ナナリーでんか。クレア＝アッシュフォードにございます。これは妹のミレイにございます。おみしりおきくださいませ。」
少し後ろに控えていたミレイと私は、貴族の女性が皇族に対して行う礼をとる。

子どもらしい高音に、ルルーシュは少し物怖じしているようにも見えたが、上手く隠して

「ルルーシュだ。以後宜しく頼む。」
と、ハッキリした発音で返す。
さすがだよ。私、本気でもこんなに綺麗な発音で切るか自信無いよ。
初対面は恙無く終了した。

家に帰って、ミレイとともに直ぐさま自室に戻る。ミレイの様子がおかしいことには気づいていたが、
「ミレイ。顔赤いよ？大丈夫？」
これは
「うん。へいき。」
赤い実弾けちゃったか（古）

たしかに幼いとはいえあの美貌の片鱗はあった。母親のマリアンヌそっくりだし。あんな感じの王子様。うわーー。眩し過ぎるよ、私には。

とりあえず、双子の妹の恋路の応援もしようと、このとき決心した。

番外　おりぬしさん　修行する。（前書き）

心の広い方のみご覧下さい。Ｃの世界での修行風景です。
サヨコさん大好きです。

番外　おりぬしさん　修行する。

サヨコさんに弟子入りしてはや数ヶ月。
最初から猶予というものは無かった。

ハタキだろうが、何だろうが、サヨコさんに持たせると凶器にかわる。
針金ハンガーなんて、本当にヤバかった。
たかが３０ｃｍほどの刃（比喩で無く。切れ味は刀並だ！！）と侮るなかれ。

まさに変幻自在。
時に鞭のように、時に鍵かまのように。戦法の多彩なこと。その変化と技数は百を超える。

謎なのは、攻撃の度に変形するハンガーは、離れて体勢を取り直す一瞬の間に、元の形に戻っているという。（全く歪んでない）

とまぁ、日常生活に於いても、いつ戦闘が始まろうが私に武器に出来ない物は無い！！
そのくらい日用品の悉くが凶器に化けた。

そして、何より、サヨコさんはえげつない攻撃を好んでいる？（怖くて確認出来るわけない）

特にお気に入りであろう物は、洗濯バサミ。

あれは……うん。

まさか！あそこで弾けるなんて！

…馬鹿な、あれはもう用途を外れている！！

…・・・うっそーーーん　（てか　もうあれは洗濯バサミじゃないっっ！！）

……・・・・あはははっはあっはははははは・・・・・（トラウマにより復活するまでしばらくお待ち下さい）

さてさて、気分を持ち直して

何故、あの白い空間でこのような修行が出来たかというと

なんと、あの真っ白ケ世界は何でもありあり空間だったわけでありました。

サヨコさんが来て早々、まず必要な物を次から次へと挙げられたわけですが

この何も無い世界にんな物在るわけないじゃないっすか

まあ、困った時の神（集合無意識）頼みをした訳ですが・・・

あれは、ド〇えもんの四次元ポ〇ットか、ってくらい出るわ出るわ
それに、サヨコさんも便乗して「池出して下さい」とかナチュラルに注文しちゃうし、要望応えちゃうし

御蔭さまで、様々な場面での戦闘経験を積むことが叶ったので良かったのでしょう
（えぇ、開き直りですよ。）

もちろん通常の体術、武器を使った戦闘（火薬、毒物扱い含む）、銃弾の避け方、無刀取りまで
ありとあらゆる戦闘を実戦にて行いました。

（なんせ、敵役が欲しいので次にやって来る悪者をこっちに回して下さい、とか笑顔で要求しちゃうんだもん。もちろんサヨコさんが）

ところで、生活はどうなっているかというと

基本、何も食べず、寝ずともＯＫなのである。
ちなみに、汗もかかず臭くならない。（でも気分転換に水浴びしたり、お茶をしたり、昼寝することもある）

疲れはするがちょっとの休憩ですぐフルチャージ出来る。
怪我も休憩すればすぐ治る。
たとえそれが致死の怪我でも。（此処に来て何回か死ぬという、ある意味Ｃ．Ｃ．の体験をした）

だって此処は、死後の世界。

（かといって、急所を覚えるために実際試すのはどうかと・・・）

修行で疲弊し怪我をする。もちろん怠いし痛い。
しかし、此処での肉体というものは、ほぼ概念としてしか存在しないため直ぐ治る、基、治せるのである。

だって怪我が治るの待ってるのって時間の無駄じゃん。
かといって、痛みゼロでは感覚が鈍ってしまう。

そこで、疲労及び怪我の回復は、１０分以上束縛無い状態で横になることを条件に、世界にルールを定義した。
（死後の世界で何やってんだ自分）

もちろん痛くて痛くてたまらないのが当たり前
そんな時はサヨコさん特製麻痺薬を煎じてもらう。

この時、笑顔で「転生したら、ある程度の薬や毒物効かないように

訓練して下さいね」
（無茶言わないで下さい）

此処で、私の戦闘衣装こうかーい。　どんどんどん、ぱふぱふぱふ☆

というのも、此処でなら衣装の吟味も、タダなのである。
決して、ゼロのように変な衣装にならないよう注意だけは怠らない。

今のところ、Tシャツ、ジャンパー、作務衣に地下足袋、猫のお面が仮決定。

お面は正体を隠し、影武者っぽい感じがするからって理由だ。

が、しかし、お面付けると相当視界が狭い。横が見えない。

サヨコさんに意見求めたけど、「形態美は大事です」って笑顔で言われて。修行在るのみって方向に片付けられた。

まあ、最終的になれたから良いか。（結果　気配探知能力が上がった）

これでお面が調達出来なかったら目も当てられないから、と思って後でプロレス用のマスクとか他にも色々試したけど、

一番視界悪かったと思うよ、お面。（「形態美」っっつ！？ですよねーーー）

他にも、諜報活動での極意とか、大掛かりなセット作って侵入の模擬やったり、
潜入調査での身の振り方、話術、所作法、序でとばかりに、茶道と料理まで。

本当に何でも出来るんですね。尊敬します。

最後に、伸び期が徐々に終わりを迎え始め、ここまでかと誰の目からも思われた頃、
サヨコさんは神に、「和室を一間お願いします」とお願いした。

普段、というか始終笑顔のサヨコさんですが、こうして真剣になられると大変緊張します。

ピンと張られた緊張の糸がその場を制圧する。
正座して向かい合い、暫し真剣な眼差しで視線が交差する。

添水のかぽんという音が響く。

「今までの修行によく耐えました。しかし、免許皆伝に至るまでにはもう一歩足りません。」

悔しく思う。才能が足りなかった、及ばなかった。
しかし、不甲斐ない、とは思わない。努力はしてきたのだから。
だから、目は逸らさず、師匠の言葉を待つ。

「ですが、期待以上に応えてくれました。ここまで到達出来るものも、なかなか居るものでは在りません。神さまにお伺いを起てたところ知識は持って行けるそうですね？
そこで、ここから先、転生後直接私に師事を請いなさい。」

思わず目を見開く。また、師匠の教えを請える？

嬉しい。この体では適わなくとも新しい生では能力は格段に上がる。
極められるかもしれない。

しかし、思った以上に冷静で居られた。

「し、しかし、あちらには転生しないのでしょう？師匠！！怪しさ満載の者が教えて頂けるとは到底思えません。」

師匠はその意志が果てるまで主に仕えると言っていた。集合無意識の中に居るルルーシュに。
だから、今此処に居る師匠は転生しない。

そして、師匠が前世でこの意志を固めたのは、物語の終盤。
そのころに悠長に修行している時間なんてとれるかどうか。

「そこで、我が一族に代々伝わる秘伝の言葉を授けます。どのような者であれ、それさえ在れば疑わぬというものです。」

一旦、言葉が切れる。

「絶対に漏らさぬと、その命に代えて守れますか？」

威殺さん、とばかりに言葉に殺気が溢れ出る。

気圧される。しかし、ここで引くことはあってはならない。

「はい。――――命に懸けて」

目、そして言葉に重く、力が入る。

「――――いいでしょう。一度しか言いません。『　　』です。

私が免許皆伝を頂いたのが、１４歳の時。皇歴にして、２００４年？　　頃です。

その頃、私は見聞を広めるためしばらくの間旅にでています。ブリタニア本土の地も踏みましたが、

確実に逢う機会があるとすれば、アッシュフォードでメイドをしている時。ルルーシュ様が１３歳を迎えられる年の春以降です。その時逢いましょう。」

今までの空間を支配していた厳しさは消え、思わず笑みがでてしまう。

「はい！！今までお世話になりました！本当に有り難うございました！！」

サヨコさん仕込みの綺麗な礼をする。

頭を上げると、とても綺麗な優しい眼差しで見ていてくれた。

その日激励会と称し、神さまを巻き込んで二人＋一柱での小さな宴が催された。

番外　おりぬしさん　修行する。（後書き）

今日の投稿はここまでです。読んで下さった方ありがとうございます。

次はのんびり書きます。

おりぬしさん　文通する。（前書き）

駄文です。
ハリポタ要素出ます。

たぶん後で修正は入ります。とりあえず、書きたい所までこのまま突っ走ります。
それでも良い方は　どうぞ。

１０／１　予告通り４～６話を繋げました。
おりキャラ注意報です。
それと、手紙のやり取りに掛かる日数を変更しました。物語に特に支障はないので、読み返さなくとも大丈夫、だと思います。
読んでいる途中の方はすみません。宜しくお願いします。

おりぬしさん　文通する。

４歳になりました。
時の流れはあっという間ですね。自我が戻って1年、色々工作しました。

まず、修行の再開。

これはCの世界で一人でも出来る修行法をサヨコさんにきっちり仕込んでもらったので
それを小出しに、準備体操のごとくゆっくりやります。

幼い体を酷使すると、成長止まっちゃいますから。
それに何も知らないはずの幼児が、いきなり型の稽古とか始めたら怪しむでしょうしね。

もちろんカモフラージュに、中華連邦のカンフー映画に興味があるように見せかけた上で。
様々な伝を経て、太極拳とか空手とかの映像を取り寄せて貰いました。
この世界は貴族の女性でも軍人になることもあるから、結構簡単にお願いが通って拍子抜けしたぐらい。

ついでに、ミレイを巻き込んで護身術の訓練も始めました。
講師はアッシュフォード縁の元軍人で、祖父の知り合いらしいです。
ＫＭＦ関連の知り合いなら、いつか操作方法を習おう。

実戦の動きはやはり本物でやらなくちゃね。

受け身や攻撃の回避。基本動作を地道に叩き込む。そんな訓練でしたが、私も意外にミレイも頑張って付いて来てます。

ミレイに「つまらなくはないか？」と誘っといてそんなことを尋ねると、

ミレイは「ルルーシュさまをお守りするの！」と可愛らしく応えてくれました。

本当に　かわいいなぁ。

目を細めて頬を赤くし、幸せそうに微笑む姿は、すでに女です。

「そう。んじゃもっと頑張んないとね！」と互いに励ましあって、

他のお稽古ごとそっちのけでやっていたら、

流石に父母に怒られ、協議の結果（あやうく止めさせられる所だった）

お稽古事に割く半分ずつの時間で、他のお稽古ごとで削った分も含め、それに相応しい結果をだせ、という条件を月ごとに示さなければならなくなりました。

父は娘が反抗期だーー。とか家令に零していたと後に（メイド経由で）聞いた。

（家政婦ってどこでも耳良いよね。）

後でフォロー入れておこう。面倒くさいことになりそうな気がするし。

私はCの世界でのアドバンテージがあるから余裕だけれど、ミレイ巻き込んでごめんね。

特訓付き合うから。

そして、情報の収集。

転生する際、神さまに付けてもらった能力（ギアス）、『動物と意思疎通を図る能力（ギアス）』を駆使して、
各地にスパイを送り込み、日々入ってくる情報を整理します。
情報といっても、私が必要なのはずっと先。
それまで生きている情報は限られたものだから、今のうちから選り分けておく必要がある。

協力者は、主に鳥類やペット達。そして、虫。
小さいほうが見つかりにくいし、居ても不自然じゃないから、虫達に大いに活躍してもらってます。
それから、ペット。
貴族達ってお金かけて飼っている割に、その半数は自由気ままで忠実じゃなかった。
なかにはちゃんと主に忠実で、見向きもされなかったのも居るけど、大抵はプライドばかり高くて、条件さえ合えばいろんなことを喋ってくれる。（相槌なんか入らない。一方的に喋り続ける）
ペットって重要な会話聞いてたりするから、本当に良い情報源。

まさか、諜報してるなんて誰が思うだろう？
ってことで、さまざまな事柄が筒抜けです。

でも私自身、それを覚えていられないから、記録をしなければならない。
当然、誰かに読まれ、バレル危険が増える。
（今のところＩＣチップに保存して、宝石箱（ガラクタ入れ）の二重底に隠している。）

嵩張らなくていいけど、そろそろ本気で考えておかないと。

うーーーん。良い隠し場所、ねぇ？

うん、そうだ。そうしよう。

わたしは適当に紙をちぎってペンを走らせた。

「じゃあ、頼んだよ、オリヅル。」

一度　ホォと鳴いて、フクロウのオリヅルは私の腕から飛立った。
足には手紙を付けて。

まるで某魔法学校の世界のふくろう便。というか意識してやった、
確信犯。
大好きだったし、こういうやり取りなら筆無精の私も続きそう。
これがやりたくて　好意的に協力を得られるように頼んだ様なもの
だしね

実際、何度か彼の協力(オリヅル)のもとミレイ相手に手紙をやり取りした。
彼以外にも頼んだことはあるが、小型の鳥だとあまり長い文面は運
べないし、そんなに遠くまで行き来できない。

ただし、今回相手は未定だ。
いずれ見つけようと思っていた、協力者候補に挨拶の手紙を出した。

相手を運任(ふくろう)せに選ぶなんて、本来の私なら絶対しない。

だけど、私には巡り合わせの強運が付いている。

今回の相手が後々協力者として暗躍してもらわなければならない。
だから、相応の人のところに届けてくれるはず。

心配だ。

相応の人でも、相性最悪かもしれない。
それ以前に、変な人だったらどうしよう。

ええい。ままよ。
なるようになれ。
その時はその時だ。

手紙(ふくろう)を送って４週間たった。
そろそろ返事が来ていい頃のはず。
私は気がつくと空に目を向けていた。

それを度々目にする祖父やメイド達は首を傾げるが、
ミレイは察して、「鳥さん来ないねぇ」と一緒に待ってくれた。
（ミレイまで空を見上げてぼーとしていることが増えたものだから、
大人達はますます首を傾げていた）

そして３０日目の晩、夕食を摂って自室に戻ると、
バルコニーの欄干にふくろうがとまっている。

急いで窓を開け、部屋に招き入れると、部屋を一周してベッドの枠に　羽を下ろした

労いの言葉と共に、用意していたエサと水の入った容器を差し出すとホォと鳴いて、水を飲み始める。

ふくろう（オリヅル）が落ち着くと、脚を差し出してきた。

それには小さく丸められた（それでも中身が大きいため膨らんでごわついている）手紙が結び付けられていて、
不快だから早くとれ、とホォと鳴く。

急いで取ってもう一度礼を言うと、直ぐに森に戻って行った。

手紙を拡げるとビニールの封筒に（そういえば濡れることを考えてなかった）半紙で書かれた手紙が一枚入っている。

そこには、文通の許可の返事と名前、連絡先そして

素敵な手紙をありがとう。ヤギ以外でも手紙を書くのね。

普通、手紙は人が書くものだと思うが。（人はヤギ以外だけど）

動物が届けたものだから、同じく動物が書いたと勘違いしたのか。
伝書鳩を知らないのか。天然なのか。冗談か。（意図が読めない）

オリヅルは野生のふくろうで、特別人に慣らしているわけではない。

手紙の受け渡しの時に、私以外の人の前でも大人しくしているように
に頼んでいる。

だから基本私以外から水や食料（飢えていれば別かもしれないが）
を与えられても受け付けない。
手紙の着脱の時に素早くしてやらないと、次からはその人物に送っ
てくれない。

その他は野生の行動をとる。

まさか、その短いやり取りで気づいたか。

まだ何とも言えないか。

私は自室の机の引出しの本の間にこの手紙を挟み、
薄手で丈夫な紙に、了承のお礼と通常の連絡先、
それから、良かったらこのまま動物を介して手紙をやり取りしたい
旨を認(したた)めて、
日をおいてオリヅルに頼んだ。

オリヅルは特に嫌がることもなく飛立ったため、この人物に対する
私の印象は良い方向にいっている。

出来ればこのまま協力者になってほしい。
そう強く願って、オリヅルを見送った。

それから、2，3ヶ月に1、2度程度の回数で手紙のやり取りをした。
ふくろうのオリヅルだけでは大変だから、猫のシシトラと犬のハマチさんにも手伝ってもらっている。

シシトラはブリタニアンショートヘアの雄で、灰色の短い毛並みが凛々しい。
ハマチさんはダルメシアンの雌で、きりっとした目つきの出来る女だ。思わずさん付けしてしまってそのまま定着している。
2人（2匹）には船とかに紛れ込んでもらって届けてもらっている。
2人ともとても器用だから、食事の心配要らずで頼もし過ぎる。

ちなみに3人とも1ヶ月あれば往復してこられる。
オリヅルは上空の気流に乗ってで分からないことも無いんだが、（いやこれもかなり速い気がする）
シシトラとハマチさんは速すぎる。

もしかしたら、飛行機使ってる？

最初は互いに挨拶からはじまり、文面も硬かったが、回数を重ねるごとにくだけてきて、
今では軽い挨拶と互いの近況、お互いのことをおもしろおかしく紹介しあった。

相手の名は、沢木（サワキ）　渓（ケイ）。
転勤族の親を持つため、渓の言葉は時々知らない方言が入る。というより、ごっちゃごちゃだ。

今は奈良に落ち着いているらしいが、大学は親元を離れ、京都方面を考えているらしい。
現在、高校1年生。
両親と5つ上の兄一人、渓の4人家族で、現在お兄さんは放浪中らしい。
渓も家族もどこに居るのか知らないが、心配は要らないといっていた。
なんでも遭難しても数ヶ月～数年で無事に帰って来たことが、一度や二度ではないという強者だそうだ。

よく文面にお兄さんのことが書かれている。
最近もまた筏（いかだ）で沖に流されて、どこかの大陸で車を修理しながら草（漢方薬になる）を探していると、手紙に書いてあったと教えてくれた。
流（ながれ）という名前で、日焼けした快活な笑顔の写真を添えて送って来たことがある。
髪は短髪だったり後ろで結べるくらい長くなっていたり、その時々で変わっているが、人の好きそうな表情豊かな人だと思う。
いつも文の最後に、もし見かけたらもう少し頻繁に連絡取るように伝えてくれ、と書かれている。

これには苦笑を漏らすが、渓自身の写真が送られたことは一度も無い。

私もまだ送ったことが無い。
（動物の写真なんかはよく送っているが）

いつか会うことを考えると、写真を送ることもしなければならないだろうが、

今現在、日本とブリタニアの関係は緊張状態にあり、とても良いとは言えない。
ひとえにブリタニアの侵略行為が、相手側に取って受け入れられないのは分かる。

渓には最初の手紙に、ブリタニア人であることは伝えてあるが、
本当に自分を受け入れてもらえるか自信が無い。

渓を信じていないわけではないが、周囲はそうじゃないかもしれない。

とりあえず、写真を送るのは先送りし、しばらくは文通を楽しんで

いた。

おりぬしさん　文通する。（後書き）

駄文失礼しました。
お気に入り登録して下さった方、読んで下さった方
本当に有り難うございます。

これからも頑張ります！

おりぬしさん　稽古する。（前書き）

おりキャラ　注意報。
姓は適当に作りました。宜しくお願いします。

おりぬしさん　稽古する。

8歳になりました。

「はあっ！」ばしっ「せいっっ！」だん「やぁっ！」どっ「たぁっっ！」ぱんっ

現在、ミレイと組手をしている。
基礎の訓練は一通り終わって、さらに実戦に向け組手の訓練が始まった。

はじめは教官相手に1対1で取り組み、その後指摘されながら2人で組手をしている。
これが一通り身に付いたら、次は武器を使っての訓練が始まる。

教官は師匠（サヨコさん）と違って力強い攻撃型の体術だ。
師匠は攻撃もするが、どちらかといえば攻撃を流し、関節技や急所一点狙いの技が多かった。

違うことを習えるのは楽しくもあるが、やはり根底にあるこの姿勢は変わらないらしい。

教官はもちろんそれに気づいている。

しかし、どこで習ったのかなどは聞いてこなかった。

自分で薮をつつくのはしたくないが、普通気になるものではないのか。
いつか、聞いてみたいこととして、今はそっとしておこう。

「今日は此処まで。２人ともクールダウンしながら片付け。終わったら報告。」

教官は使用したものが片付けるという考えを持つ、ブリタニア人としては珍しい思考の持ち主だ。
そして、使う前よりも綺麗にしないとやり直しを言いつけられる。
たとえその後に用事があろうとも。

ミレイと私だけでは、広い訓練場を綺麗にするのは一苦労だ。
そして、時間が掛かりすぎてもやり直しか、普段付けているアンクルの重さが増えるため、忙しく動くと全然クールダウンにならない。
最後までやり終えて、いつもへとへとの状態でシャワーを浴び、次のお稽古ごとに向う。

渡り廊下を走りながらミレイは時間を確認する。

「ったいへーん！クレア、次ボンホート先生の時間だわ。前回少し

遅れっちゃったから。今日遅れるとお父様達に告げ口されちゃう！！」

只でさえ時間を短くしてもらった他のお稽古ごとを蔑ろにしていると、元に戻すと前回イエローカードを出されている。
今日遅刻しようものなら、即レッドカード。

訓練の時間が取れなくなると非常にまずい。
私の計画ではルルーシュ達に付いて行く気つもりだからだ。

「〜〜〜っ。こうなったら奥の手よ！！があちゃんッ！！」

開け放った窓の外にいたカナリアの　があちゃんを呼ぶ。（育ての親がアヒルだった）
私の頭上を旋回して、差し出した指の上に停まる。

「先回りして、ボンホート先生を足止めして来て！！」

ピィッ　直ぐに飛び去って行く。

それを走りながら見て、ミレイは私に目線を移す。

「あいかわらず、クレアと仲良しよね。いいなぁ。」
「ははっ。私程じゃないけど、ミレイだって動物達に好かれていると思うわよ？」

角を曲がって直ぐの部屋の扉を開く。まだ先生は来ていないようだ。

息を整え、身なりを整える。

「私は特別だから。それだけはどう仕様もないけれど、それ以外ならミレイの方が魅力的だわ。
例えば、　　――――ルルーシュ様のこととなると、とっても可愛くなっちゃう所とか。」

すると、ミレイの顔は真っ赤に染まる。

「っっずるいわ、クレア！ルルーシュ様の話で誤摩化すなんて。」
グーでポカポカ背中を叩く。　　・・・以前より威力が増している。

「ほら。こんなに可愛い顔しても私はルルーシュ様じゃないから落ちないわよ？」
少し涙で潤んだ大きな目で睨まれても可愛いだけよ、ミレイ。

「っもう。知らないっ」

拗ねてそっぽを向く姿も可愛いのだが、言ったら言ったで余計拗ねるだけだから、
今はそっとしておく。

「　　――――ふう、少し遅れてしまいましたね。ごめんなさいね。
なんだか今日は鳥に懐かれちゃって。初めてだわ、こんなの。」

中年の女性教師が少し髪を乱して入って来た。どうやら、頭に乗ったようだ。
彼女が私たちに歴史と芸術関係、行儀作法を教えてくれる、サラ＝

ボンホート先生だ。

「さあ今日はブリタニアの歴史を学びましょうね。ブリタニア公リカルドは――――・・・・・」

「ふう～～～。おわった～～～。」
どさっとベッドに倒れ込む私。スカートが舞い上がる。
ミレイははしたないと怒りながら、隣に腰掛けた。

「ミレイ」
「なーに、クレア？」
ベッドにうつぶせクッションに顔を埋め込んだまま、話しかける。

「私、ちょっと日本に行ってこようと思うの。」

おりぬしさん　稽古する。（後書き）

ありがとうございました。
それから　新たに登録して下さった方ありがとうございます！

おりぬしさん　会いに行く。（前書き）

宜しくお願いします。

おりぬしさん　会いに行く。

軽い足取りで降り立つ。そこは私の故郷。この世界ではないけれど。日本。

後に、ブリタニアに侵略され、エリア１１と呼ばれるようになる場所。

前世から数えてもう数十年、この土地から離れていたが、やはりそこは私にとって祖国だった。

これから、私は会いに行く。
今後、どう動くか分からない自分の協力者に。

ある一定の条件で選ばれた人物ではあるが、私が特定することは出来なかった協力者。

しかし、神様に頼んだ巡り合わせを、今のところ私は信じるほか無い。

二人分の巡り合わせという条件は、どの段階で使用されるか特定していない。

それこそ、巡り合わせなのだから、不特定要素に対応出来るように、わざと遊びを持たせてこれを願った。

そして、すでに一人目は使ってしまっている。
師匠（サヨコさん）だ。

前世で一般人でしかない私がこの世界で何かを為すには、どうしても技術が必要だった。

そして、最高の師であったと、私は感謝している。

生まれ変わって出会った人物で、此処まで思う人物は居なかった。
ルルーシュたちは願うまでもなく、アッシュフォードであればいずれ出会う機会は十分予想される。
だから、此処で消費されたとは考えられにくい。

少なくとも計画終了まで協力的であればいい。

ルルーシュに明日を一日でも長く生きさせられれば、この契約は切れる。
そのあと、私は生きたいように生きる。

特に何かをしようと決めては居ないけれど、心の赴くままに、自由に人生を楽しむんだ。

だから、神さまの宿題をちゃっちゃと片付けてしまおう。

考え事をしていたら、目的地に着いていた。
戦前の日本は都市機能も充実している。空港から電車で目的地――――奈良へ。

待ち合わせは駅近くの喫茶店。

相手は大きな帽子を被り、黒で統一した女。
そして私は、大きなぬいぐるみにうさ耳フード。

絶対目立つよね。
そりゃ室内でそんな大きな帽子被ってりゃ分かり易いし、フードとぬいぐるみで顔と髪を隠し易いけどさ。

目立ったら内緒話出来ないじゃん

気づけよ、あの時の自分。
つい、悪のりしちゃった自分のばか。

「私、ちょっと日本へ行って来ようと思うの。」

ちょっとジュース買いに行ってくる、並に気軽に言った。

「なんでまた?!」

驚きすぎて、私の肩を掴む力が強い。

「私が文通してるの知ってるでしょ?その人に会いに行きたいの。」

顔を上げて理由を告げる。するとミレイは渋い顔をする。

「今、日本とどんな関係か知らない訳じゃないでしょ?」

今ブリタニアと日本は緊張状態にある。それを、ボンホート先生の授業で聞いている。

「ええ。だから戦争が始まる前に会っておきたいの。」

何でも無いことのように話す。でも、目は真剣に。大丈夫だと諭すように。

「それなら私も一緒に行くわ。クレアだけじゃ心配よ。」

まるで今生の別を引き止めるような物言いだ。

そんなミレイに苦笑して、茶化して言う。

「ははっ、大丈夫よ、ミレイ。それに私には優秀なボディガードが付いているわ。」

ハマチさん達の名前を挙げていく。数十匹目で

「・・・そんなに連れて行くの？」
今度は別の心配の目線だ。
ことさら可笑しくなって、声を立てて笑う。
「ね。みんな優秀でしょう？」
「いえ、みんな連れて行けないでしょう」
呆れられてしまったが、今はそれで良い。
「ならあっちで優秀なボディガードに付いててもらうから大丈夫よ。ミレイ、行っても良いでしょ？」

「私も付いて行きたいわ。」
だめなの？

「今回が初めてだから、また今度ね。きっと素敵な人だと思うけど、いきなり2人で行ったら、向こうも困っちゃうでしょう。」

まだ何か言いたそうだったが、大人しく引いてもらう。
両親達には見聞を広めるために、ペンフレンドの下で学んでくると話した。
もちろん反対された。
だから、
「まあ、マリアンヌ様が折角手配して下さったのに。残念だわ。ナナリー様も私が学んでくるのを楽しみにしてらしたのに・・・」

いつもは絶対しない、しょんぼりした様子で、素直に引き下がる私をみて、祖父が

「まあ、いいじゃないか。クレア、しっかり学んで来なさい。」

やったね☆

事前に日本文化のあれこれを、ルルーシュ様とナナリー様の前で披露しておいて正解だったわ。

こうして私の日本渡航が許可されたのでした。

「お待たせ。クレア。」

早く着きすぎて先に席でパフェをつついていると、前から全身真っ黒で大きな帽子を被った女性が話しかけて来た。

「そんなことないわ。はじめまして、渓。」

「こちらこそ。はじめまして。」

異様に視線を集めながら私たちは対面した。

おりぬしさん　会いに行く。（後書き）

ありがとうございました。

おりぬしさん　協力を求める。（前書き）

没ネタを読まれた方有り難うございます。
そしてごめんなさい。こんな人なんです。

宜しくお願いします。

おりぬしさん　協力を求める。

カラン

アイスコーヒーの氷が音を立てる。

今、私は、渓と対面している。

そして、会話が続かない。

うーーん、困った。

きっと鏡を見たら、まゆが八の字だ。

こういう場合、どうするんだっけ。

「っぷ」

顔を上げると、向いに座る渓がおなかを抱えて捩り出した。

「ふははっ、あーごめんね。ちょっと反応みたくて、わざと黙(だんま)りしてみた。」

「〜〜〜もう。からかわないでよ。気まずかったじゃない。」

「ごめんってば。いやー、まさかこんな可愛らしいお嬢さんだと思ってなかったものだからさ。似合ってるよ、うさみみ。」

そういえばそんな格好でした。なんか無性に恥ずかしくなって来たー。
目印に被ったままのフードを下ろすと、「かわいかったのにー、ぶーぶー。」と文句を言う。

「渓が指定したから、わざわざ買いに行ったんだよ。」
「で、自分で選んだの、それ？」
「妹（ミレイ）よ。」

普段自分がからかう立場だから、何かちょっと腹立つわ。
むすっと、ほおを膨らませ言い返す。

「そういう渓こそ。どこに行ったらそんな服買えるのよ。よく見たらかなり凝った造りじゃない？その服。」

渓の着て来たパンツスーツは真っ黒で分かりにくいが、細かい刺繍やレース、飾りボタンで凝っているが派手じゃない。全体的にシックでかっこいい。
くそう、似合ってる。

「だってこれ自作だもん。」

「はあ！？　・・・まあそうだろうね。似合ってるもの。――――
ところで、会話は共通語なのね。」

手紙であれだけ使っていた方言を、今一切聞いてない。

「ああ、そうね、共通語ね。だって、ブリタニア人なのに手紙は日本語だし。どのくらい通なのか気になるじゃない。」

ああ、この人。同類の匂いがする。

ニコニコ笑ったまま、注文したコーヒーをストローでかき混ぜながら、こちらを窺ってくる。やりにくいわ。

「で、そろそろ本題はいろっか」

切り出したのは渓の方だった。

「何かしてほしいこと、あるんでしょ？」

沈黙。

「・・・どうしてそう思うの？」

するとわざとらしくあごに手を当てて推理を披露する。

「うん。なんとなくそう思ったのが切欠なんだけど。野生のふくろうが手紙届けて来たりで、初めは気づいてなかったよ。後で全部の手紙読み返してね。」

一番初めに出した手紙を、テーブルに出す。

「『私と文通してくれませんか？わたしはクレア＝アッシュフォードといいます。

返事はふくろうの足に付けて下さい。大人しくしてくれているはずですが、なるべく速く取り付けてあげて下さい。』

どう考えても日本名じゃないのに、文面は日本語。しかも、ふくろうは北ブリタニア大陸に分布している種だし。

アッシュフォードは一部で有名だからね。」

うん、自分油断し過ぎだ。よく考えたらかなり危ない文面だよ。

「で、何か意見はありますか、お嬢さん？」

私は軽く両手を上げて、降参の意を示す。

「無いわ。」

満足そうに笑みを浮かべて話を促す。

「で、私になにをしてほしいわけ？」

意を決して渓をみる。

「協力してほしいの。これから起こる、いいえ、起こすことに。」

おりぬしさん　協力を求める。（後書き）

次話もっと変わります。m（＿）m

ありがとうございました。

おりぬしさん　条件を呑む。（前書き）

ストック出し切ります。
宜しくお願いします。

おりぬしさん　条件を呑む。

「いいわ。ただし、条件を出させてもらう。」

「一つ目は、私に危害が銜えられるようなら、可能なら即逃げさせてもらう。
二つ目は、誰にも従う気はない。邪魔はしないから、自由に行動させてもらうわ。
三つ目は、ーーー」

私に誠意をみせて

出された条件は後々計画に支障を来すかもしれない。
でも、これからやることは間違いなく、人死にがでる。
それだけじゃない。一歩間違えば———世界が終わる。
普通こんな賭けに出られるわけが無い。
それにいくら過程の未来を知っているからといって、必ずしもそうなるとは限らないし、
私が関わっている以上、絶対に未来が変わるだろう。

死なない人が死ぬことだってあり得る。

ぎゅうっと拳を握りしめる。

危険なんだ、今やろうとしていることは。

そして、本来関わらなくても良い渓を巻き込むことになるんだ。

当然の権利だろう。

だから

「その条件、のむわ。そして、

降りて。」

暫し見つめあう。ただし、恋愛要素一切無い。

「・・・私に協力を求めに来たのに、いいの？」

「ええ。これは私の問題であって、本来、貴方は関わり無いことだ

もの。
私が間違ってた。　――なんとかするわ。幸い私にはあの子達がいるし、一人じゃないしね。」

努めて明るく振る舞う。いや苦いものを我慢して、笑顔を作った様な顔をしていそうだ。

2人の間に沈黙の時間が流れる。

「はい、お終い。　ごめんね。無理なお願い言うだけ言って、結局止めるなんて。勝手にもほどがあるね。
――渓が良ければ、文通だけは続けさせてほしいのだけど「おい」・・・」

「言いたいことはそれだけ？」

笑っているのに怒っている。とはまさにこんな感じなのだろう。
初めて体験した。二度はごめんだわ。

目をそらしたら、きっと手が出るんだろうな。
（いや、訓練で慣れているけど）

蛇に睨まれたカエルのごとく、極寒ブリザードの幻覚を感じながら固まった。

「何一人で自己完結してるわけ？何様？人に頼み事しに、わざわざ海超えてやって来てさ。こんなんとか。
わざわざ呼び出しに応じてやったのに、私の意見無視なの？ふざけんなよ？

誠意見せろってのは、こんなことじゃなくて、これから先どうするのか聞いてんのよ。

それを、何勘違いしちゃってんだか。どうせ、これから戦争にでもなるんでしょ？
その年齢で、一人で私に会いに来た。そうしないと行けない理由があったからよね？

そんでそれに間違いなく私や家族は巻き込まれるでしょ？関係なくなんて無いじゃない。

――――さっさと、これから、どうするか、　吐け。」

え、何この人。こわい。

性格、ちがいませんか？

「返事は？」

胸ぐらを掴まれないだけ増しだろう。このテーブルだけ異常な威圧感だ。

「っっっっはいいいっっ」

おりぬしさん　条件を呑む。（後書き）

ありがとうございました。

次回投稿は　次のお休み次第です。休みが無くても書けたら書きます。

頑張ります。

おりぬしさん　嘘をつく。（前書き）

時間は日本から帰って来て、しばらくしてからの話です。

ナナリーは４歳くらいのはずですが、どこまで出来るのか分からなかったので
かなり適当な幼児です。
すみません。
宜しくお願いします。

おりぬしさん　嘘をつく。

「クレア。この子は何とおしゃられているのでしょう？」

今、私はアリエス宮にいます。
そして、ナナリーに手の内の一つを絶賛公開中。
ナナリーの指の上には、があちゃん（カナリア）が鎮座している。
見上げて尋ねるナナリーに、微笑ましく思う。

「ナナリー様なら仲良くなってもいいと」

「ホント？！」
「ええ。この事に関しては、嘘は申しませんわ。」

そういうと、大きな目を大きくしてこちらを見る。そして、すぐに眉が寄る。

「クレアは、他のことなら嘘をつくの？」

ナナリーは嘘が嫌いだ。
そんなナナリーに苦笑がこぼれる。

「好んで嘘を吐くわけじゃありません。ちゃんと理由があって私は嘘をつく事を選んだりします。」
嘘は手段の一つ。そして、他に方法があるなら、そちらを選びます。
と告げれば、
何とも言えない表情でこちらを見つめる。

「じゃあ。嘘を吐かなくていいようにしてください。私は嘘つきは嫌いです。」
素直なナナリーは受け入れられないようだ。

この皇室に居れば、嘘などありふれた物だろうに。
ここまで潔癖に育ったのは、偏にルルーシュの努力の甲斐があっての物だろう。
（うーん。ルルーシュ、あいつナナリーを手放さない気なのか？）
嫁に出さん！！という親父ルルーシュが頭の中で繰り広げられる。
簡単に予想出来る過程の未来を打ち消し、質問をぶつけてみた。

「では、ナナリー様。もし、大切な人に嘘をつかれたらどうしますか？」

すると弾かれたように反論を返す。

「嘘をつく人は嫌いです！それに、お兄さまは嘘をついたりしません！」
そんなことを言うなんてひどいです。

「もしも、の話ですよ。それがナナリー様のためを思って嘘をつかれたら、そう思いますか？」
お嫌いになりますか？

すると、

「たとえ、どんなことでも嘘は嫌いです。私のためなら、どんなこ

とも正直に話してほしいです。」
ナナリーの心は、何処までも真っ直ぐだ。が、

「それではルルーシュ様は隠し事ができません。」
それでは、ルルーシュ様が困ってしまわれますよ。

「・・・それではだめなの？」
ルルーシュとの間に隠し事など必要ないと思っていたのか、
ルルーシュが困る事になる、と言えば、不安そうに聞く。

そんなナナリーに、苦笑しながら、

「そうですね、ルルーシュ様なら、辛い事や悲しい事、はたまた、
酷く醜く、愚かな事に関わりあった事を、
大切なナナリー様に隠したいと、思われますよ。」

暫く沈黙して、ナナリーは

「では、私はどうすれば良いのでしょう？」

大好きな兄には、嘘も隠し事もしてほしくない。
しかし、それではルルーシュを困らせる事となるらしい。

どうすれば、困らせずに、嘘も隠し事もしなくて済むのでしょうか、
と
この間に必死に考え出した。

そして、自分がどう動けば良いのか、と
自ずと導き出した。

（この想いがルルーシュに届ける事が叶えば、あんな事にはならないかもしれないが。）

私は、この計画の成功の鍵を握るのは、ナナリーだと思っている。
だから、その布石となるように、ナナリーにとってほしい次の行動を示した。

「では、ナナリー様。ルルーシュ様が嘘をつかなくてもいいように、
隠し事をなさらなくても良いように、
まずは、勉学の方も力を入れていきましょうね。」

「！？」

ナナリーの勉強は、つい最近始まったが、動き回ることが好きなナナリーにとって、これはあまりよろしくない展開だ。

嘘や隠し事をなくすことが、どうして勉強に繋がるのか、幼いナナリーにはわからなかったが、

大好きな兄が、嘘をつくことの方が、断然嫌だったので、

「お兄さまのためなら……」

「それでこそ、ナナリー様です！」
まだ渋い顔をして、覚悟が固まらない様子だが、
やりようによっては、自ずと学んでくれるだろう。

その為に、私は

「そんなお兄さま思いのナナリー様に、
ルルーシュ様の超絶可愛い写真をプレゼントしちゃいましょう！」
「これは！！」

それは、ナナリーが風邪気味で共に行くことが出来なかったリ家での物。

通常シスコンなルルーシュは、看病すると辞退するが、

その時は、ルルーシュに用事のあったユーフェミアが、訳を話そうとするルルーシュを、
強引にさっさと連れて行ってしまったのだ。

後からナナリーのことを聞いた、ユーフェミアはさすがに悪いと思い、ナナリーにドレスを贈ったのだが、

「このきれいな方はお兄さまですか？」
「勿論。」
そこに写るのは、先日贈られたドレスに身を包み、カツラと薄い化粧を施されたルルーシュの姿。
「どうしてこの写真を！？」
「ふっふっふ。リスザルのアレス君にカメラを持たせたんです。そうしたら、偶然撮った写真の中に入ってました。」
これは半分本当で半分嘘だ。
アレス君には超小型カメラの使い方を覚えてもらい、ルルーシュを尾行し撮って来てと頼んだら、偶々女装させられていたのだ。
そして、
「ごめんなさい、ナナリー様。私は今、半分嘘をつきました。」
「どうして？」
嫌いだと、あれほど言ったのに。それに、クレアは嘘をつかないと言わなかったか？

「ナナリー様のためです。」
「どういうことですか？」ますます意味が分からない。

「ナナリー様は、今の話で、何が本当で何が嘘か、分かりましたか？」

「……いいえ。」

「そして、私はナナリー様にお話してないこともあります。」

それは何と聞き返すナナリーに、今日は特別です、と
すぐに答えを明かす。

「私は今、“リスザルのアレス君にカメラを持たせたんです。
そうしたら、偶然撮った写真の中に入ってました。”と言いました
が、
実のところ、“アレス君には超小型カメラの使い方を覚えてもらい、
ルルーシュを尾行し撮って来てと頼んだら、偶々女装させられてい
た”というのが真実です。」

そういうと、唖然としていたナナリーは、みるみるムスっとした表
情になる。

「……クレアは意地悪るです。」

ふふふと意地の悪い笑い声を立てる。
「はい。わざとですから、今回はしてやったり、です。」
誉め言葉として受け取っておきます、
と言えば、ますますムスっとした表情になる。

「これが、私なりの勉学です。そして、これからも時々嘘をつきます。」
「……。」
「それを見破って下さい。」
「……。」
「ルルーシュ様のために、頑張って見破って下さいね。」
「・・・・？」
眉を八の字にして、そっぽを向いていた顔をこちらに向ける。
「でないと私、写真を全部独り占めしちゃいますよ？」
「！！？」

私はまだ見せていないもう一枚の写真をひらひらと振る。
そこに写っているのは、その格好のまま微笑を浮かべるルルーシュ。
先ほど見せたものより、今ひらひらとさせてよく見せてくれないものの方が、断然可愛らしく見える。

「欲しいですか？」
「はい。」
「じゃあ。私が出した宿題を持ってこられたら、あげましょう。」

「宿題？」
「はい。それから、一生懸命考えた答えじゃないと、あげませんから、頑張って下さいね。」
「わかりました。宿題は何ですか？」

「“人はどうして嘘をつくのでしょうか？”、を考えて答えを出して下さい。」
「それが宿題ですか？」
「はい。ちゃんとご自分で考えて下さいね。」
すぐにルルーシュ様やマリアンヌ様に教えてもらったりしても、ダメですからね。

指を立てて注意すると、
難しい顔をしてわかりました、と了承する。

「そういえば、
ルルーシュ様はドレスを持って帰られた時、何も言われなかったのですか？」
ドレスのサイズはルルーシュ用なので、ナナリーには大きすぎる。
変に思わなかったのか、と聞くと
「・・・はい。何も、聞いてません。本当にそうですね。
クレアのおかげで気がつきました。」

早速見つけたルルーシュの隠し事に、ナナリーの表情は逆戻り。

「私、勉強がんばります！クレアには、嘘をいっぱいついてもらっても構いません！！」

真剣に言い切ったナナリーに、私が吹き出し、それにつられたナナリーも可笑しくなって
アリエスの庭に2人分の笑い声が響いた。

おりぬしさん　嘘をつく。（後書き）

別名、ルルーシュに初めてドレスを贈ったのは、リ家姉妹でした話。これは、ルルーシュの汚点ですので、ルルーシュは記憶から抹消します。（笑）

でも、後に生徒会長に写真が見つかって

おりぬしさん　王子さまに会う。（前書き）

短いですが　宜しくお願いします。

おりぬしさん　王子さまに会う。

クレアがアリエス宮にお邪魔していると、皇族の来訪が告げられた。
クレアはお暇しようと立ち上がると、部屋の扉が開かれた。
入ってきたのは、第2王子シュナイゼルと、第3王子クロウ゛ィスだ。
二人に会うのは初めてだったため、挨拶をして出ていくつもりでいた。
しかし、意外にもクレアの同席を許可されたので、適当に理由を告げ辞退することにした。
「大変有難いことではございますが、私はこれより用事がございます。誠に残念ですわ。」
いつもと違い、ちゃんと皇族に向けた挨拶をすると、
ルルーシュはいぶかしんで
「そうだったか？僕はてっきりナナリーとお茶をすると思っていたのだが」
今度はルルーシュに向け、笑顔で対応する。
いつもは絶対しない完璧な猫かぶりに、ルルーシュは少々辟易する。
「ええ。この度、ナナリー様にお勉強を教えることになりましたの。」

「んなっ！？」

クレアの衝撃発言に、
ルルーシュはすかさず、変なことを教えたら只じゃ措かない、と
目線で訴える。

グサグサと刺さる目線に、流石に流すのはどうかと思い、

「ルルーシュ様、何か？」

ボソッ「……要らないことを吹き込むなよ」

先ほどまでの雰囲気を一転させた二人の様子に、
シュナイゼルとクロウ゛ィスは、暫し状況を見守った。

クレアは二人の様子に気づいていたが、スルーして笑顔で

「あら、ルルーシュ様。心外ですわ！

私がナナリー様の為にならないことを教えるわけないではありませんか！

女には殿方の知らない処世術が有りますの。
勿論、殿方であるルルーシュ様には教えてあげられませんから、
聞かないでくださいね。

それから、女は女の中でしか成長しませんのよ？

いつまでも妹離れ出来ない殿方の元に居ても、原石まま。
美しく輝くことは出来ませんわ。
女は殿方の籠の外で、美しい鳴き声を学ぶものなのです。」
ウフフフ、と笑うクレアは
圧倒的強者だ。
これには、その場にいた男性陣は暫し呆然として、
「……ハハハ、これはルルーシュ、一本取られたね。
こちらのお嬢さんは、相当口が回るようだ。」
「これからもこの調子で弟を宜しく頼むよ。」
クロウ゛ィスとシュナイゼルは、
クレアの姉のような姿に、素直に賞賛の言葉を贈る。

「はい。勿論ですわ。」

ルルーシュを置いて、話が進む。が、それを3人は気にもとめなかった。

そして、あの一癖も二癖も、ついでに一物も持っている兄と、

今日初めて会ったこの少女を並べてみて、
この二人、案外良いかもしれない、とクロウ゛ィスは思い、
要らぬお節介をやく。

「兄上とこんなに気が合うなんて……。
兄上、これは是非ルルーシュとの婚約を解消してもらった方が宜しいのでは？」

それを聞いたクレアは固まり、シュナイゼルの方は、
あの弟をここまで口で封じたクレアを、遣り込めてみたくなって、
面白がって話に乗った。

「……ルルーシュ、ということなので、こちらのお嬢さんを譲ってはくれないかい？」

それを聞いたクレアは、頭に盥が墜ちてきたような衝撃を受け、ルルーシュは

「兄上！僕の婚約者はクレアではなく、彼女の妹のミレイです！
それに、そのような言葉はクレアの許可をとってから言うべきでしょう！」

フェミニストな教育を受けたルルーシュは、こういった場合、女性を立てるのを忘れない。

しかし、問題はそこではないことをルルーシュは気づかない。

くくっと、小さく笑い、

しかし、シュナイゼルは敢えて別の解釈をする。

「おや、そうだったのかい？
それは二人に失礼だったね。

では、改めてクレア、君はどうだい？」

あからさまに、私の反応を楽しんでいる！
腹黒め！

思っていることを顔には出さず、鉄壁の仮面の笑顔で

「あら、わたくし等では殿下には釣り合いませんわ。

寧ろ、殿下にはルルーシュ様のような方がお似合いですわ！」

と、矛先をさりげなくずらして躱す。
クレアの思いもよらない返答に

「何を言い出すんだ！クレア」
「おや。確かに。そうだね。」
「ああ、ルルーシュなら僕のお嫁さんに欲しいな。」
「なぁ！！！」

同意する兄たちに衝撃を受けるルルーシュ。

「でしょう？
将来性抜群な容姿と知性を持ち合わせた方、
ルルーシュ様をおいて、他にありませんもの。
……でも、お二方。ルルーシュ様は将来私の弟となるのですから、
お嫁には出せませんわ。」

遊ばれていると気づかないルルーシュは、率直に反応する

「僕は嫁には行かない。
それに、クレアを姉だと思うもんか！」

憤慨するルルーシュに、悪いと思わない3人は暫く弄りたおした。

おりぬしさん　王子さまに会う。（後書き）

セットで出ていただきましたが、いまいち掴めないキャラです。

今後、この二人との絡みが有るかもしれませんが、恋愛フラグ０ですので、あしからず。

おりぬしさん　惚れられる。（注）（前書き）

百合っ子のあの子に惚れられます。苦手な方は回れ右。

読まなかった方は、とりあえず、ニーナが協力的になるとだけ。

宜しくお願いします。

おりぬしさん　惚れられる。（注）

いやね。まさか、私がそんなことになるなんて

結論をいうと、告白されました。相手は女の子で、

名前を、ニーナ＝アインシュタインといいます。

はい、百合ッ子のあの子です。

ですが！！

弁明しておくと、ニーナはまだ百合じゃありません。

どうやら、男の子と勘違いされました。

きっかけはこうでした。

3日前。

私は、つい最近入手した仮面を装着して、棒術の練習を早朝の誰もいない公園にて、一人黙々と行なっていた。

ランニングの後、柔軟体操をしっかりとしてから、
組み立て式の棒を取り出して、それを思いきり体全体を使いながら、振る。

きっと、端からみたらきれいな舞に見えるはず。
師匠（サヨコさん）がやっているのは、いつもきれいだった。
修行時代の体と違い、転生後の体は羽のように軽く、しなやかに動ける。

１０分ほどかけて、数十種類ある型を一通り流し、それを辿るように何度も繰り返す。

そして、２度目の中盤に誰かの視線を感じ、危険を感じなかったので放っておいた。
しかし、その視線の主はどんどん近づいて来ている。

視線を感じる方向に目を向け、相手を確認。
あれ、女の子……？

５度目が終わり一旦動きを止める。そうしたら声をかけられた。

「あ、あの」
あれ、この子どこかでみた。
「何か？」
出来るだけつんけんしないように、気をつけて声を出す。

「あの、えっと、その」
それでも相手は落ち着かず、どもって先に進まない。

「？何だい、ちゃんと聞くから、話してごらんよ」
気さくに顔を崩すが、そういえば今、仮面を付けているから表情が分からないだろう。
お面をとってもいいが、何故仮面を付けているのか聞かれたら、面倒だ。
「は、はいぃ。……あの」
「うん？」
「とっても、カッコよかったです。……見てても、いいですか？」
語尾に向かって小さくなって行く声は予想より低く、アルトボイスだ。
私は了承の返事をすると、先ほどの続きを開始する。

それから1時間くらい続けて、

「そういえば、こんな朝早くからなんで公園に？」
現在、午前6時30分。1時間近く振り続けていたから6時前にはここに居たのは確かだ。
夏場に近づいて来たとはいえ、6時前の公園はまだまだ薄暗い。

唐突に声をかけたせいか、ビクッと肩を跳ねさせた。
そういえば、こんな子だった。
苦笑して相手の返答を待つ。

「……見えたから。貴方がその棒で何かしているの」
気になって

疑問は解決させたいタイプの人間らしい。
好奇心旺盛なのは結構だが、時にそれは身を滅ぼす。という教訓を、前世のアニメでやっていた。

…あの眼鏡少年探偵は、まだ続いているのだろうか？

「そう。でも、相手がどんな人か分からないのに、武器を持った人に近づくのは、危ないから止めなね。」
言いたかったことを注意しておくと、

「でも、貴方は……きれいだったから……」
「……そう。ありがとう？」

疑問形なのは、ほほを染めて言われたから。

引っ込み思案のわりに、いうことはいう子だ。認識を改めてふと気づく。

いや、いやいやいや。

ちょい待て、自分。

なんでこの子頬染めちゃってんの？！

なんか、この反応はミレイで見たことがある。
考えに耽っていたら、
「ぁあの、また来ます！」
といって、走り去られてしまった。

去られてから、名前を聞くのを忘れたことに気がついたが、
また来るのならその時聞こうと、放置した。

そして、その日の午後。

祖父の知り合いの孫娘が、私たちと年が近い、ということで会うこととなっている。

何でも、その子は引っ込み思案の性格と、比例して科学に愛情を注ぎすぎて、結果友人が居ないそうだ。

これを心配して、祖父に話を持ちかけ、こういうことになったのだが、

「……はじめまして、ニーナ＝アインシュタインです。」
「…はじめまして、クレア＝アッシュフォードです。」

「はじめまして、ミレイ＝アッシュフォードよ。……どうしたの、二人とも？」
「「……。」」

あの時、仮面を付けていたが、声は全く変えなかった。（その他にも、服装はランニングシャツに薄手の上下からTシャツに短パンと違うが、明るい金髪を隠すことはしなかった。）
……変えとけば良かった。

己の行動を反省していると、ニーナが話しかけてくる。

「あの、朝、会いました、よね？」

「うん。意外と早くに、また会えたね。」

ミレイが、そうなの？じゃ、二人はもう友達なのね！という。

友達と聞いて、ニーナは嬉しそうに笑む。

その笑顔は可愛くて、勿論私もよ！と、ミレイは抱きつきながら宣言する。

その時は、ミレイが中心となって回っていたが、二人きりだったら沈黙の時間が多かったことだろう。

ミレイに感謝して、別れ際に、今度は明後日いるから、と伝えておく。

明日は用事が入ってしまい、居なかったら悲しむだろう。

そう思って声をかけたのだが、

「……はい！待ってます！！」

なんで、頬染めてるのでしょう？ニーナさん。

朝早くなので、絶対に居る時間を伝えて、
くれぐれも待たないように言い含める。

ミレイは、私たちをニコニコ見るだけだった。
（きっと、面白いことになると、感じとったのだろう）

そして、昨日。
前回と同じくランニングの後に公園に向かうと、ニーナはバスケットを片手に待っているのが見えた。

その中身、朝食ですよね？
わかります。

二人の距離はまだ遠く、私はこめかみに手をあて、ため息をつく。

待ってなくていいのに。

この時期、変質者が増えるのだ。
まだ、人が疎らなこの時間、
女の子が一人で居るのは非常に危険だ。

そこから走って向かう。

ニーナも気付いたようだ。

片手を小さくあげ、声をだそうとしたとき、背後に影が射す。

私は、全力疾走で、ニーナが気づいて振り向く前に、

「ニーナ！目を瞑って！」

「！？」

視界に入れさせないように、指示を出し、背後に居た男に飛び蹴りをくらわせる。

急所にもろに入った男は、後ろに倒れる拍子に、ポケットに隠し持っていたナイフが転がる。

……変態、じゃなくて良かった。

ニーナにそんなもの見せて、男性不審になったら大変だ。

（だからといって、通り魔も十分危ない。怪我させなくて良かった。）

転がったナイフを、反対側の草むらに蹴り飛ばし、

いきなりの乱闘に驚くニーナが見ないように、

まだ目を開けちゃダメだからね！と念押しして、

男は、近くの草むらに放り捨てた。

「ニーナ、平気？」
「うん。何だかわからなかったけど。ありがとう、守ってくれて」
そういったニーナに安心して、
思わず腰が抜けた。
「……」
「大丈夫？！クレア、どこか怪我したんじゃ・・・。」
みるみる顔を青ざめさせ、心配するニーナに、大丈夫腰が抜けただけ。と返す。

それから、やっぱりこの時間は危ないから、これからは家においでと、
早朝の自主トレを変更せざるを得なくなった。

ｓｉｄｅニーナ

本当は、クレアが何をしていたのか薄目で見てたの。
背後から知らない大人が近づいていたらしくて、血相を変えたクレアが目を瞑るように言ったの。
何で目を？、と思ったけど反射で目を瞑っちゃって、クレアがその人を倒した瞬間を見る事が出来なかった。残念。
薄目を開けると、クレアはまだ瞑っているように言った。
でも、私はクレアが何をするのか気になって、気づかれないように薄目で見てたの。

倒れた大人は、見た目は普通で、暖かくなって来たこの時期にコートを来ていたけど、暑くないのかな？
それからクレアは何かを呟いていたようで、よく聞こえなかったけれど、良かった、と聞こえたからいいことにした。
ナイフを蹴った方向と違う方向に倒れた大人を移動させて、
もう良いよ、と言われるまで今度はちゃんと目を瞑って待っていた。
お礼を言うと、クレアが尻餅をついちゃったから吃驚して、
あわあわと心配していたら、大丈夫と、怒られちゃった。
でも、またお家に行っていいって言ってくれたから、
今度からはお菓子を用意して会いに行こうと思った。

そして、別れ際に
「あのね、わたしクレアが大好きです。」
て、言ったら、かなり顔色が悪くなってしまって
私は女だからね！私よりも素敵な男性はたくさん居るからね！って
焦って言われたけど、クレアが女の子なのは知っていたし、クレア以上に素敵な人なんて考えられない。
でも、落ち着いてほしいから
「あれ、女の子なの？てっきり私男の子だと思ってた。」

って、わざというとやっと落ち着いてくれた。

でもやっぱり私、クレアが大好きなことに変わりないけどね。

好きです、って言われて相当焦ったーー。

今心臓どきどきいってます。主に、心労による痙攣で。

ｌｉｋｅ　じゃなくて、ｌｏｖｅの方だって分かったから余計焦った。

焦りすぎて、ｌｉｋｅの方で返答せずに、女だから宣言してしまったけれど、

結果的に

男の子だと思ってたって、言ったから

うん、ニーナの勘違い。

おりぬしさん　惚れられる。（注）（後書き）

おりぬしさんの勘違いです。ドンマイ。

ニーナもキャラが分かりにくいです。でも、あの世界のキャラで分かり易いキャラいないんです。好きな方ごめんなさい。

とことんキャラ崩壊路線行きそうです。（ぺこり）

番外2　主人公からみたおりぬしさん（前書き）

ルルーシュ視点です。

前話、百合要素をいれてしまったので、苦手な方向けになればと思います。

宜しくお願いします。

番外2　主人公からみたおりぬしさん

ルルーシュ視点

俺から見て、あいつは不可解だ。
突飛で理解不能な行動が目立つが、後々、それは布石となってあいつの良いようになっている。

そして、自分の妹に変な事ばかり吹き込み、ナナリーまでそれに感化されてきた。
全く、迷惑だ。俺のナナリーがあいつのせいで悪い方向に行きやしないか、気が気でない。

つい先日だってそうだ。

アリエスの庭で、ナナリー、ミレイ、あいつと共に午後のひとときを過ごした。
そこで、皇族のみ持つ事が許される、“専任騎士”の話となった。

「わたしはお母様のように、大きくなったらお兄さまの騎士になるの！」

ああ、ナナリー。本当に良い子だね。
でも僕はナナリーを守りたいから、ナナリーを騎士に選ぶ事は出来ないよ。

そういうと、今度はミレイが

「では、私が騎士となっていつまでもお二人をお守りしますわ！」
ミレイは俺たちの前で膝をつき、臣下の礼をとる。
ナナリーは、それは名案です。一緒にお兄さまをお守りしましょうね！、とミレイの手を両手で取りぶんぶん振る。

「あら、ミレイ。それじゃ貴方分裂しないと、２人を同時にお守りするのは無理よ」
クレアは冷静に今の話の短所を指摘する。
「なら、クレアも一緒に守りましょう？」
ミレイは勧誘する。
騎士って、そんなノリで任命していいものだったろうか？

クレアは2人の視線を受け、考える（あれはポーズだと、最近知った）。
「う〜〜〜ん。私はパス。」
エーーー、と2人分のブーイングが響く。
これにも、俺はどうかと思うが、
「だって私。自分が一番可愛いもの。誰かのために命をかける騎士なんて、到底勤まらないでしょ？」
うん。クレアの口から正論が聞けるとは。（自分が一番可愛い発言はスルー）

しかし、クレアはクレアだった。
こちらを向いて満面の笑顔で、

「だから、――――――私たちを守って下さいね？未来の皇帝陛下さま？」

それを聞いた2人が、それ良いです！ちゃんと守って下さいね？未来の皇帝陛下さま！！

と乗っかるのは、目に見えた近未来だった。

番外2　主人公からみたおりぬしさん（後書き）

ありがとうございました。

ルルーシュで遊ぶのはとても楽しいです。（笑）

番外　家族からみたおりぬしさん（前書き）

時間軸は次話の後になります。

宜しくお願いします。

番外　家族からみたおりぬしさん

＊＊＊＊＊母親視点＊＊＊＊＊

あの子は、本当に私の子？

だってあの子は、初めから知っている。
何も知らないはずなのに、

変だ、と気付いたのは
双子の妹のミレイが居たからだ。

何時からだろうか。
赤ん坊の頃は全く二人の差に気付かなかった。

何処にでもいる普通の子ども。

言葉を覚え初めたころぐらいだろうか。
ある時、私は見た。

あの子は、異国の文字を書いていたのだ。
ちゃんと見た訳ではないし、知らない国の文字だったから、内容を
知ることは出来なかった。
よく考えたら、巧みに隠していたのだろう。

あの子が1週間日本に行っている間、あの子の部屋のなかを粗方調べたけれど、
全く見つからなかった。
後で部屋の掃除をメイドに言い付けたが、それらしいものは見なかったという。

あの子が帰ってくれば、内緒で探すことが出来ない。
いいえ。本当ならあの子に直接聞いたらいいのだけれど、
どうしても出来ない。

何故かあの子が遠くの存在で在ることを証明することになりそうで
こわい。

あの子も、自分も。

初めから私の子ではなかったと、証明してしまうことが、
そして、私はそれに安心しそうだ。

帰って来たあの子を、私は抱きしめてあげられなかった。

内心がばれてしまいそうだから。

あの子は……恐ろしい子だ。
人の感情にさとく、少しの情報で全て見透かされた気分になる。

ああ、私疲れてるのよ。
我が子にこんな感情を向けるなんて。

あの子が帰って来てしばらくして、あの子はまた日本に行きたいという。
それも、長期留学だ。
理由を聞くと、失われる前に知りたいという。
何が？

聞いてなかった。
ああ、そうだ、技術だ。それも特別な。
普通の子どもなら何が出来ると、突っぱねてしまうだろう。
しかし、この子ならそれも可能な頭脳と努力を証明している。
この前の1週間ほどで得た知識を、レポートにまとめて提出したほ

どだ。
きっと、この留学で更に深い知識を持って帰るだろう。
だから私は、反対する夫を諌めて送り出した。

夫を諌める理由の一つに、きっとこの国の為になるとか言ったような気がするが、
本当のところ、国などどうだっていい。
例え、后妃の一人の後ろ楯でも

我が子を置いて大切なものなど、有りはしない。

その後、夫との間は拗れてしまったが、
舅の仲立ちも入り、今では口くらいなら利いている。

それも、あの子が無事に帰ってくれれば、元に戻るだろう。

今度、あの子が無事に帰って来たら、
今度はちゃんと抱きしめて「おかえり」と言ってあげよう。

あの子は、私の大切な娘の一人だから。

＊＊＊＊祖父視点＊＊＊＊＊

あの子は聰明な子だ。

武道をやりたがっていると聞いたので、知り合いに頼んだのは私だ。
しかし、きっかけを聞いた時、疑問が浮かぶ。

クレアは中華連邦のカンフーというアクション映画を大層気に入り、
武道全般に興味を示し始めたようだ。

ブリタニアにもアクション映画は数多くある。
しかし、クレアが興味をしめすのは、東洋のものばかり。

何故。

そして、私の疑問は尽きるどころか増す一方。

この度、留学したいと言ってきた。場所は日本。
先日、１週間ほどプレ留学をしてきたばかりだ。
そんなに気に入ったのなら、と言ってやりたいが、
ここ最近の情勢は芳しくなく、とてもじゃないが、子供一人で長期留学などもってのほかだ。

そして、それに対しクレアは
「私はあの国がある内に、あの国の特殊な技術を学んでおきたいの」
と頭を下げて懇願した。

本当に賢い子だ。

ブリタニアの植民地政策は、被植民地側の全てを否定する。
クレアが学びたがっている技術も、植民地化してしまえば廃れてしまうだろう。

なので条件付きで、日本に送り出した。

これに父親である息子は猛反対したが、意外にも母親はそれを諌めて、留学が決定した。

その後の息子夫婦の間は拗れたが、私の仲裁が入り少しだけ緩和された。

あの子が帰ってくれば、また元に戻ることを信じて、

今日もあの子の無事を祈る。

＊＊＊＊＊父親視点＊＊＊＊＊

あの子は私の可愛い娘だ。

あの子も下の娘のミレイも、利発で、活発で、明るく優しい。
目にいれても痛くない、とはこの事を指すのだろう。

武道を習いたいと言って来たとき、初めは危ないからしてほしくない、と思った。

しかし、我が一族はマリアンヌ様の後見だ。

マリアンヌ様は武功で后妃まで登りつめた方なのに、
後ろ楯である私が、娘に武術をやらせたくないとは、可笑しなことだと、
父親に押しきられ、渋々了承した。

そして、今度は1週間の旅行だ。
場所は日本。

今我が国と緊張状態にある。
そこにあの子は行きたいという。

何でも、学びたいことが有るそうだ。

これには、勿論反対した。

しかし、またもや父親に押しきられる形で、あの子は行ってしまった。

最近、娘が反抗期だと、つい口を滑らせてしまったほどだ。
（その後、話し相手だった家令以外にも、どこか哀れむような目で見られた。）

そして、娘が帰ってきた。

勿論、私は強く抱きしめたが、
あの子はそう長くはさせてくれず、ミレイの方に行ってしまった。

父さん、泣いていいかな

しばらくして、あの子は長期留学をしたいと言って来た。
場所は、いよいよ危なくなりそうな、日本。

猛反対した。
流石に今回は、父も反対した。

そしてそんなあの子に、父は理由を尋ねる。

うん。我が子ながら聰明さを窺わせる理由だ。
これが、日本でなければ、行って良し、と言っていたかもしれない。
もちろん、国内だって絶対反対するが。

しかし、その理由を聞いた父の顔を見て、
一気に血の気が失せる。

そして案の定、父は敵となった。

私は、それでも反対した。
可愛い娘が危険な所に行くなど、許可出来ない、と
そして、今まで黙っていた妻に助けを求めた。

しかし、

妻は裏切った。

いや、前回は黙っていたから、実際どうか知らないが、
今回ははっきりと許可を出した。

それから、あれよあれよという間に留学が決定して、あの子は行ってしまった。

それからしばらくして、妻と口を利かなくなった。

娘が戻って来るまで、私は口を利く気もなかったが、
流石にまずいと思った父が仲裁に入り、一応事務的に話すようになった。
（それまで言いたい事は、プラカードに書いていた。）

今思えば、ミレイには申し訳ない事をした。

あの子が帰って来たら、
また、強く抱きしめてやろう。　ミレイとともに。

今度は自分が満足するまで、2人とも放してやるものか。

そして今は、あの子の無事を祈ろう。

番外　家族からみたおりぬしさん（後書き）

明日　更新出来たら…
がんばります

ミレイと両親不仲説ですが、私は愛情の形の相違
ということで進めます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9160w/

おりぬしさん　奮闘する。

2011年10月19日02時00分発行